

特集 比較文化研究

はじめに

西 川 長 夫

比較文化研究の特集も第4回になった。今回は1995年12月9日と10日に連続して行われた二つのシンポジウムを中心に組んである。12月9日のシンポジウム「民族問題を考える」は、お話をいただいた徐京植、大野英二両先生からあらためて加筆した立派な原稿をいただいた。コメントの文章もそれを読んだうえで、文京洙、末川清の二人にあらためて書いていただいた。ここで提起されている問題は深く射程は大きい。このテーマのシンポジウムはこれからも時機をみて続けてゆきたいと思う。

12月10日のシンポジウム「外国における日本研究——アメリカを中心に」は、広田昌希、平田由美さんによる、歴史研究と文学研究の二つの側からの報告を中心に、コーネル大学のブレット・ド・バリー、ヴィクター・コシュマン両教授の参加もあり、国際的なものになった。このシンポジウムの方は参加者のみなさんの協力をいただき、報告、コメントの他に討論の内容もすべて再録することにした。このシンポジウムの前後に出版された日米の研究者による共同研究、山之内靖、ヴィクター・コシュマン、成田龍一編『総力戦と現代化』（柏書房）、酒井直樹、ブレット・ド・バリー、伊豫谷登士翁編『ナショナリティの脱構築』（柏書房）の二冊を参照していただくと、シンポジウムで語られたことの意味がいっそう明らかになるだろう。本年の7月13日には、同じコーネル大学の酒井直樹氏や国立清華大学（台湾）の陳光興氏をお招きして、この続篇ともいえるべきシンポジウムを行う予定である。

上記二つのシンポジウムは、いずれも比較文化研究会の他に、日米共同研究会、文化交流史研究会、日本史研究会近現代史部会、立命館大学言語文化研究所プロジェクトAⅠ、AⅡ研究会などの共催で行われたが、記録は比較文化研究特集に収めさせていただくことになった。第二のシンポジウムの組織と編集にかんしては広田昌希氏の御尽力に負うところが大きい。その他名前は記さないがシンポジウムの参加者および関係諸氏の御好意に感謝したい。

なお本特集には、シンポジウムの他に比較文化研究会の中心的なメンバーである中

2 特集 比較文化研究

本真生子，笹田恭史，両氏の論文が収められている。中本氏の論文はアルザスを扱った民族問題にかかわるものであり，笹田氏の論文はイデオロギー論の系譜にかかわっている。若い研究者の新しい研究方向を示すものとして掲載させていただいた。

1996年 6 月 3 日